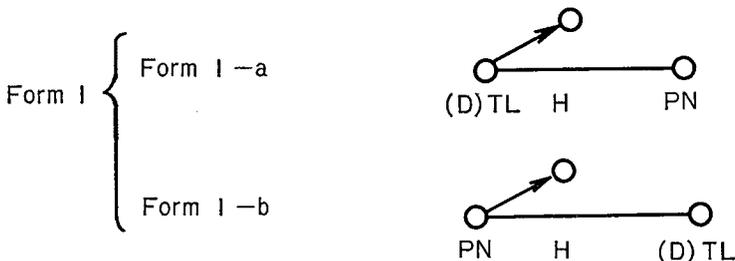


# Bede の教会史の古英語訳

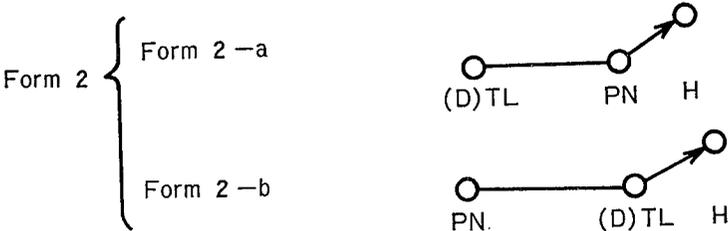
## における 属格群

早坂 信

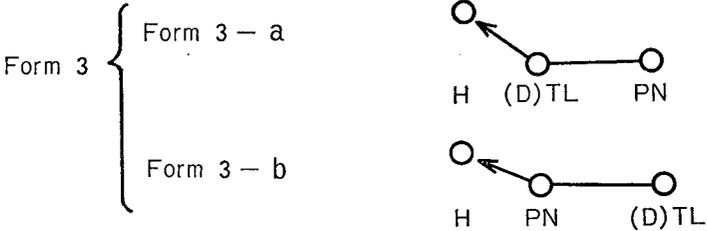
古英語（以下OE）の属格の用法のうちで、興味深い属格群（Genitive Groups）の類型について、「アングロ・サクソニックル（A, E）における属格群」（学習院女子短期大学紀要X pp. 76-89）で述べた。今回は、そのつづきとして、Bede の教会史のOE訳（The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People, 2 Vols Edited by Thomas Miller. E. E. T. S. O. S. Nos. 95, 96; 1890, 1891）に出てくる Genitive Groups を調べてみたい。このOE訳はラテン語からの翻訳で、10世紀末の英語と考えられており（*ibid.* p. xv），原文に忠実な面と、ある程度自由に文を変えている箇所もある。それでは Genitive Groups に関してはどうか。word order がラテン語の word order の影響を受けているであろうか。それともOEの型になおされているであろうか。今回の調査では、同格を含む Genitive Groups のみを取扱い、前回の Form の類型では、Form 1, Form 2, Form 3にあたる（紀要 X pp. 86-7）。まずOE独特のものは Form 1 で Headword (H) を中心にして、その前後に Title (TL) と Proper Noun (PN) が位置する「やじろべえ」型である。即ち、



ここでDは Demonstrative であるが、ラテン語の場合は無いので(D)とした。Form 2は属格になる TL と PN がHの前に位置し、



となる。Form 3は、Hが属格の TL と PN の前にきて



となる。

それでは、ラテン語の Genitive Groups がOE 訳でどの Genitive Groups の類型になっているか、実例をみながら調べてみる。

(1) ラテン語の用例では、Form 1 にあたる word order は一つもない。

(2) Form 2 については、例は少ないが次のような例がある。(L はラテン語の意)

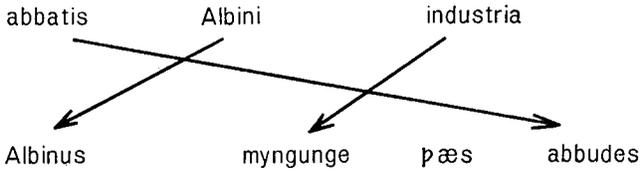
L Form 2-a → OE Form 1-b

例 L abbatis Albini industria

OE *purh Albinus myngunge þæs abbudes* (p.4)

(注) ページ数はテキスト (Miller 版) のページ数を示す。

図で示せば



また

L Form 2—b → OE Form 3—b

L in utroque Hildae abbatissae monasterio

OE in æghwæðerum mynstre Hilde *pære* abbudissan (p. 334 l. 30)

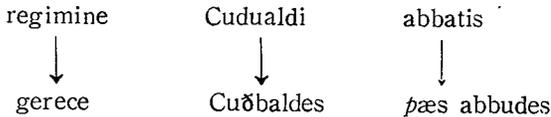
(3) ラテン語では Form 3 が圧倒的に多く、それに対応する OE は Form 3 と Form 1 に分かれている。

(イ) L Form 3—a → OE Form 3—a

例 L sub regimine Cudualdi abbatiss

OE under gerece Cuðbaldes *pæs* abbudes (p. 464 l. 18)

この例の word order は



のように同型である。

(ロ) L Form 3—a → OE Form 3—b

例 L sub praesentia regis Ecyfridi under andweardnesse

Ecgerðes ðæs cyninges (p. 368 l. 3)

(ハ) L Form 3—a → OE Form 1—a

例 L filius patruī eius Aelfrici

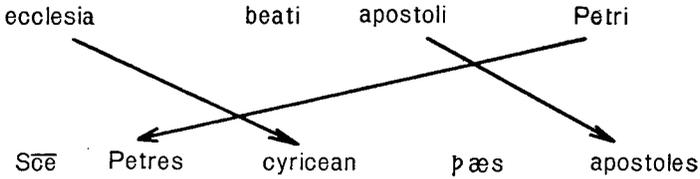
OE his fæderan sunu Ælfrices (p. 152 l. 6)

(ニ) L Form 3—a → OE Form 1—b

例 L in ecclesia beati apostoli Petri

OE on Scē Petres cyricean *pæs* apostoles (p. 464 l. 21)

すなわち



と、OEでは属格要素が前後にきている。

(ホ) L Form 3—b → OE Form 3—b

例 L in ecclesia beati petri apostoli

OE in cirican Scē Petres pæs apostoles (p.358 l.28)

この例は、(ホ)の例とまったく同じ句なのだが、L、OEとも word order が異なっている。

(へ) L Form 3—b → OE Form 1—b

例 L filius Osuii regis

OE Osweos sunu pæs cyninges (p.360 l.2)

(4) OEでは Genitive Groups の構文であるのに、Lでは Genitive の要素が一つ欠けていたり、syntax が違っていたりする例が案外多い。例えば、

L porro Focatis anno

OE pæt æreste gear Focatis pæs caseres (p.92 l.23)

ではOEの pæs caseres にあたる部分がLになかったり、

L praesente rege Aediuno

OE in Eadwinis ondweardnisse pæs cyninges (p.144 l.12)

のようにLでは属格を用いていない。

さてここで一覧表にしてみると、用例数は次の通りである。

L		OE		用例数
Form 2—a		1—b		2
2—b		3—b		1
3—a	}	3—a	(同型)	22
		3—b		6
		1—a		3
		1—b		15
3—b	}	3—b	(同型)	15
		1—b		30
Genitive Groups ならず		Genitive Groups		64
計				158

## 結 論

1. ラテン語では Form 1 がまったくみられないのに対して、OE では数多く存在する。このことから属格群の word order に関しては、OE 訳は原本のラテン語の影響をあまり受けていないと言えよう。

2. Form 2 に関しては、ラテン語の例が少ないので何とも言えない。これはラテン語では Form 2 が希有ということか。

3. Form 3 については、L と OE が同型のものが多く、残りは Form 1 になっている。OE で Form 2 の例はない。

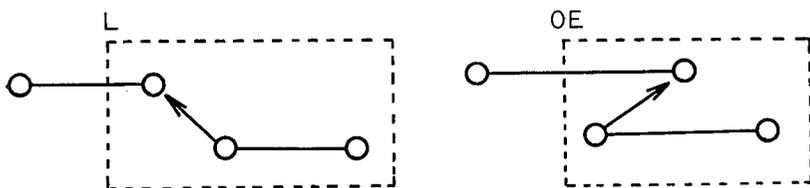
4. ラテン語には、対応する Genitive Groups がない OE の用例が 4 割近くあるという事実は、OE 訳者(達)がラテン語にとらわれずにある程度のびのびと翻訳したと考えられる。また、結論 1 と同様に、ラテン語が OE の Genitive Groups 形成にあまり影響を与えていないことも示している。

5. 要するに、ラテン語の Genitive Groups は属格要素を後置する傾向 (Form 3) が強いが、その OE 訳については、同型のものもあれば、属格要素の一方が前置される型 (Form 1) も数多く、その Form の選択に、一定のルールはみられない。

6. 今回は基本型のみ調べたが、その派生型についても、OE独特の型はラテン語にはみられない。例えば、Form 1—b—i の用例として

L	Aelfaini	frater	regis	ECgfridi
	↓			
OE	Altwine	Ecgfrīðes	broðor	pæs cyninges

図で表わすと



となり、点線の中をみれば、

L Form 3—a → OE Form 1—b

で、p.76 の(二)にあたる。

以上のことから、BedeのOE訳に関しては、Genitive Groupsのword orderはラテン語のword orderの影響を受けていないと結論できよう。

(注) ラテン語版は、Baedae Opera Historica 2 Vols. Harvard University Press, 1963を使用した。